

平成27年度 労働災害防止論文 金賞

労働災害防止対策への提言

株式会社ベルックス 志賀良三

毎年雪の時期になると、一番気になることは転倒等による通勤災害が多く発生することである。他社事例を調べたことはないが、労災の通勤災害に関しては上期より雪の時期が含まれる下期が当社では多い。北海道全体でも同じような実態ではなかろうかと思う。

時節柄、朝早い出勤は気温も低く、路面が凍結していることが多い。そこに足を捕られ、転倒し足の骨折や庇い手による手首の損傷・骨折や打撲が過去からの事例として報告されている。

更に事故が起きているケースを分析すると
①除雪が不十分な朝方が多い。
②家を出てすぐの場合が多い。
③外の階段等家の周辺や横断歩道上が多い。
という結果になる。

原因は幾つか考えられるが、
①十分にウォーミングアップをしないで急に寒い所に出た。
②厚着により体の自由が奪われていた。
③何よりも時間に追われる行動が一因になっていた。と素人ながら分析してしまう。

かく言う私も、以前妻が地下鉄ホームの階段で転倒し、労災認定を受けたことがある。

これも雪で階段が濡れていたにも係わらず、電車の乗り継ぎに急いで転倒し手首を捻ったものである。

痛い思いをし、職場や同僚、そして家族に迷惑をかける労災。特に通勤災害に関しては事有る毎に注意喚起はすれども、例年同じような事例が報告されるのは痛ましいことである。

例えは適切でないかも知れないが、雪道にな

ると車が坂道を登れなかったり、必死に止まろうとしていたり、追突しているのをよく見る。その多くは、制動の効かない古そうなタイヤを装着した営業の車が多く、タイヤさえ制動の効くものを装着していたらと残念に思う。雪に慣れないと多くの観光客は雪道を歩く時に一番にすることは、滑り止め用バンドを靴に付けることだという。転ばぬ先の杖といったところである。

私たちは雪に慣れきっているため、雪道での「行動を起こした先にどのようなことが起こり得るか」を安易に考えてしまい、車にタイヤと同じく履物や服装を気にせず、それによって事故に結びついている件も多々あるのではないだろうか。個人で出来ることは限られるが、観光客のように少し自分に投資をして、安心を買う意味で「履物・服装・帽子等でケガを未然に防げる物」の用意も必要ではないだろうか。それにより防げる事故も増えてくると確信する。

次に職場で出来ることも多々あるが、防止の注意喚起は一年を通して常日頃からやっておくべきである。当社の職場では起きてしまった事故事例と注意喚起を毎月の給与明細に添付している所もある。各部所でも防止に向けた様々な取組みをしている。防止の一助になっていることは間違いない。

冬型事故の他、自分が注意していても、自転車等による貴い事故も多い。今更ながら一人ひとりが常にルールを守りマナーを守るという、極々当たり前の行動が一番に望まれる。

「継続は力なり・力は百の理屈にも勝る」

私の好きな言葉である。

平成27年度 労働災害防止論文 銀賞

声掛けから始まる労働災害防止

北海道クリーン・システム株式会社 今 井 克 之

私は平成24年4月に函館支店に転勤になりました。函館支店に転勤する前は6年間、札幌支店に在籍し札幌駅の商業施設で警備業務に従事していました。

札幌で業務に従事していた頃は、労働災害防止という事柄は意識しても、業務に集中するあまり気持ちが薄れたり、疎かになるのが現実でした。函館という新しい赴任先で清掃業務や警備業務等の多岐に渡る業務に従事し、より一層労働災害防止への気持ちや意識改革に繋がる教訓を学びました。

この教訓を学んだのは函館支店に赴任になり、初めて配属になった函館駅営業所での清掃業務での経験でした。私は札幌にいる頃は警備業務のみに従事しており、函館に来て初めて清掃業務に従事しました。私自身、当初の先入観で清掃作業や清掃道具の操作はすぐに出来るだらうと安易に思っていましたが、実際に業務を行った際、数ヶ月はうまく行かなかったことを思い出します。

そこでうまく行かなかった頃、上司や先輩方に清掃作業や清掃道具の操作方法をいろいろと教えて頂きました。その清掃作業や清掃道具の操作以外に学んだのは『勤務者同士による危険箇所を見つけて声掛けする労働災害防止』のアドバイスでした。

函館駅営業所での従業員の多くは鉄道会社経験者のO Bが在籍しており、諸先輩方が鉄道会社に在籍していた頃にあった受傷事故の話を多く聞きました。同僚が列車に接触し、身体に大怪我をしたことや最悪の場合、手や腕等が無くなったりという痛たましい事故の話を聞きました。その見聞きした事故を起こさないため、諸先輩方は清掃業務に移っても常に意識を持って危険箇所を見つけたら同僚に声掛けをする習慣を持っています。

この危険箇所を見つけたら声掛けすることは案外、出来そうで出来ないのが現実です。『それくらいわかっている』や『経験者だから自分

は失敗しない』と互いに過信する経験はだれでも持っていると思います。ですが実際に事故を起こすと『なぜ、あの時、危険箇所を排除する努力をしなかった』と事故後に反省するのが事実です。

清掃道具はモップ等の柄を持つ道具からポリッシャー等の動力を用いた大型道具など様々です。場合によってはその道具の使用によっては自分自身への受傷事故にもなる道具になりますし、お客様や同僚への第三者被害にも繋がります。例えバケツの水をこぼしたとしても、その水溜りを踏んで滑って転倒すること等の展開も考えられます。実際、清掃作業や種々の作業を行っている時に集中すると周りが見えなくなることはだれでもあると思います。人間の目は前にしかありません。例え視野を広くして周りに気を配らせてても危険箇所に気づけないことは起き得ることです。その際に同僚が危険箇所に気づいたら『後ろの道具にぶつかる!』『コードを踏みそうだ!』と声掛けのアドバイスすることで受傷事故率も減って行きます。

『一人の目より複数の目を持って、そして互いに声掛けする』という危険性への共有することが労働災害防止になって行きます。

では一人作業の配置箇所では声掛けは出来ないので、どのように危険性を排除する努力をすればいいでしょうか。

その答えは取引先にあった事故防止啓発ポスターの一旬の『指先に意識を込めて指差喚呼』という言葉です。経験や慣れが生じると人間は過信や惰性に向かっていくことは少なからずあります。その時に作業開始から作業終了まで怪我や事故をしないという緊張感の意識を込めて作業することでも事故率は減ると思います。

自分はこれからいろんなビルメンテナンス業務を行っていきます。職場内で言葉にして労働災害防止の輪を広げ、そして自分自身は『打てば響く』という人間となり、会社内の労働災害を減らして行きたいと思います。

平成27年度 労働災害防止論文 銅賞

ヒヤリハット体験と対応

北海道クリーン・システム株式会社 田 村 彰 教

ヒヤリハット体験があつたら、職場に報告し、それがまた起きないように対策を立て、同じ様なヒヤリハットを起きないようにし、事故防止につなげていく取り組みは現場で働く者にとって、助かる取り組みである。

私が勤める会社では、以前に発生したヒヤリハット情報は一覧表や、場所であるならば危険個所として地図や図面に記し、注意喚起を行っている。このようにして、従業員が原因のお客様に対する事故や、従業員自身に起こる事故や怪我を未然に防ごうとしている。

私のヒヤリハット体験であるが、従業員用通路から売り場に出る為、売り場側へ押して開ける扉を開けたときであった。少しずつ慎重に開けていたのですが、たまたま扉の前に立ち止まっているお客様がいた。今回は事なきを得たが、対策として次の事を行った。

このヒヤリハット体験を報告し、それとともに、一覧表や危険個所を示した図面に記載した。これにより、言葉での伝達だけでなく文字・図面で伝達できるようになり、全員の認知度が一層上がり、扉の開閉に注意する意識が高い状態が続いている。

この例だけでなく、他にもヒヤリハット等は発生する。そうすると、新しく発生した方に注意が向いてしまう。この新たに発生したヒヤリハット等を注意するのは当然である。

しかし、以前に発生したことを失念、時間の経過により忘れてしまい同じ様な事象を起こしそうになる。そのような時は、作成した一覧表や図面で再確認し、自分自身で注意喚起している。

このように継続して様々な所に注意を向けていると注意しながらの行動が通常の状態であるようになり、仕事上良い習慣が身に付くと考える。

この場所は普段と違う、あの辺りは危険箇所のようである等気付いたり、考えたり出来るようになり、事故・ヒヤリハットを減らしていくと思われる。

この作成したヒヤリハット一覧表や図面はほかにも、新人研修等にも使用してくことができると思われる。どの職場でも起こり得るものは、全員に、職場固有のものは、配属先で周知し、さらに、実際現場で場所等を確認することで理解・認識度の向上に役立つと考える。さらにこのような注意喚起により、事故・ヒヤリハット自体を起こしにくくなることも考えられる。

事故が起きると周りも大変であるが、実際に大変な思い、苦労をするのは本人である。その本人にならないようにするために、ヒヤリハットが起こったとき、そのままにするのではなく、報告・対策をすぐ行える職場環境が重要である。

このような環境を継続できるよう、事故は起こさない・起こさせない、の気持ちで日々業務に取り組む思いである。

平成27年度 労働災害防止論文 佳作

ヒヤリハット体験と対応

札幌施設管理株式会社 及川 慎一郎

私は、札幌市営地下鉄で「駅設備保守管理」の業務を行っております。この仕事に携わって約10年になりますが、常に心掛けているのは、お客様の安全を第一に考えて作業を行うということです。

入社して数年過ぎた頃、作業をしている時にヒヤッとした経験があります。それは多くのお客様が行き来する駅のコンコースでのことでした。私はコンコース内にある換気機械室で荷物の運搬作業を行っており、換気機械室とコンコースを何度も出たり入ったりしておりました。すこし前まではお客様はいなかったから今回もいないだらうという勝手な思い込みで、換気機械室の扉を開けてしまいました。するとそこにはお客様がいて、もう少しで扉がお客様にぶつかってしまうところでした。その扉は換気機械室側から外開きの扉で「開けるときは、お客様に注意をして安全をキチッと確認してから開けろ」と先輩方に何度も言われていたにもかかわらず、お客様の安全確認を怠り扉を開けてしまいました。幸いお客様とはぶつからず事なきをえましたが、私は肝が冷えたのを今でも鮮明に覚えています。もしうつからてお客様に怪我をさせてしまったことを考えると今でもゾッとなります。そうなりましたらお客様に怪我を負わせてしまうだけでなく、会社の信用問題にも関わってしまいます。自分勝手な思い込みから色々な人に迷惑をかけ、今まで先輩たちが築き上げて

きた信用を、一瞬で失うところでした。「信用を得るには時間がかかるが、失うのは一瞬」と良く聞きますがまさにその通りだと思います。

今後外開きの扉を開けるとき、お客様の安全を考えどのようにしたらいいのか私なりに考えてみました。コンコースではお客様の通行の様子を観察しますと、壁すれすれに歩いている人はいなく、壁に沿って床に貼られているタイル(35cm)を空けて、それから中央よりを歩いている人がほとんどでした。色々試した結果、換気機械室の扉の厚み(約5cm)を考え、換気機械室側から各30cm、角度にして約25度開いてもお客様にぶるかる可能性は低いと判りました。安全を考え最初は15cm開き(角度にして20度位) それから30cm開き、お客様の安全を確認した後、完全に開けるという手順が一番良い方法であるという結論が出ました。扉には、「ドア開け注意！ドアの向こう側に、人がいるおそれがあり危険です」の注意書きステッカーが貼ってあります。扉を開く際は必ず注意書きを読み、自分で確認した方法で扉の開閉を行っています。

私は、この扉開閉でのヒヤリハットから、ほんの些細なことで、お客様への安全が失われ、それにより会社の信用を失いかねないと言うことを考えさせられました。今回の件に限らず、どんな仕事でも常に危険は潜んでいると想え、お客様の安全を第一に仕事を続けていこうと考えています。

平成27年度 労働災害防止論文 佳作

労働災害防止対策への提言

株式会社ベルックス 白井義信

昨年、全国で発生した労働災害件数をご存知でしょうか。

労働災害統計によると、全業種合計で年間約12万件、単純計算で1時間当たり13件以上の労働災害が発生しているそうです。

何故これほどの件数が発生するのでしょうか？我々現場管理者が繰り返し注意喚起しているのにもかかわらず……。

ある本によると、「人は目の前に迫った危機に対して、“自分は大丈夫”と楽観視する傾向がある」そうです。まさにこの“自分は大丈夫”という危機意識の低さが、年間12万件という数字に繋がっているのではないかでしょうか。

勿論、作業方法や手順の間違いに起因する事故もありますが、その多くは「労災事故」を他人事として捉え、自分の目の前にある“危機”を見過ごしてしまっているのでは。

数字が示す通り、1時間に13回、凡そ5分に1回は自分の身に危険が迫っていることを、作業者自身に自覚させることが、事故を防止するうえで最も重要なことなのです。

我々は現場を訪問した際、ついつい「気を付けてね」と作業者に声を掛けます。でも、作業者自身は当然気を付けているのです。ただ、現場に潜む“危機”に気が付かず、事故が自分の身に振り掛かってくるなどと思ってもいなけれ

ば、「気を付ける」意味がありません。

その「他人事」という意識を変え、事故は自分にも起こり得るんだと気付かせることが事故防止への近道ではないでしょうか。

会社（上司）からの一方通行的な注意喚起では、事故防止効果はありません。むしろ、作業者側にしてみれば、会社が困るから注意しろと言われているようなものです。

まずは「何故、労災事故を起こしてはいけないのか」を作業者にしっかりと説明することです。困るのは決して会社だけではありません。「同じ職場で働く同僚」「突然、代務員として現場を移動する人」。そして何よりも事故に遭う自分自身が「痛い」思いをし、家庭生活にも不自由を来て、最終的には家族も困ることを教えて下さい。

そして、そうならない為には、現場で起こり得る様々な事故を想定し、その対策について一緒に考えることが重要です。

こうしてお互いの防災意識を高めることで、目の前に迫る“危機”が見えてくる筈です。

どんな機械も、どんな作業手順も、100%安全なものなどありません。

最終的には、作業する人の“意識の違い”が事故との分かれ目なのです。

平成27年度 労働災害防止標語 入賞者

金賞

いい汗も少しの油断で冷や汗に

協和総合管理(株)

岡 田 亜矢子

銀賞

あいまいな 理解と仕事が 事故のもと

中央ビルメンテナンス(株)

岡 部 友 哉

安全は 慣れた作業は確実に 不慣れな作業は慎重に

北海道クリーン・システム(株)

加賀美 澄 子

銅賞

安全作業に先輩なし みんなが毎日1年生

才ホーツク美装興業(株)

瀬 尾 純 一

今日だけ 今だけ ちょっとだけ だけの数だけ 危険あり

北海道クリーン・システム(株)

高 橋 雄 一

そんな事 こんな事でもまことに確認 惰る心に事故の影

北海道クリーン開発(株)

寺 田 浩 二

佳作

明るい笑顔 こころにゆとり 今日も一日安全作業

札幌施設管理(株)

及 川 治 之

朝一番 笑顔で挨拶 良い仕事 中央ビルメンテナンス(株)

吉 田 武 彦

あせらずに 心のゆとりが ミスなくす日本ビル管理(株)

遠 藤 龍 治

焦る心にブレーキを 一步手前で 危険予知

北海道クリーン・システム(株)

金 澤 友 子

安心と安全の先に待つのは お客様の信頼(株)ベルックス

高 橋 功 一

安全は一つ一つの積み重ね 基本動作を徹底し 今日も一日 無事故無災害

協和総合管理(株)

高 田 政 俊

急ぐな 焦るな 慌てるな 待っているのは危険だけ

(株)トーショウビルサービス

明 石 穂 糜

うわの空 ゆるんだ気持ちが 事故のもと

東京美装北海道(株)釧路支店

姥 名 恵

運転は 焦らず無理せず油断せず

協和総合管理(株)

奥 村 直 彦

- 落ちついて 焦る気持ちが 事故の元
東京美装北海道(株)千歳支店 清 水 恵 子
- 体も仕事もしっかりチェック 今日も笑顔の無事故デー
北海道クリーン開発(株) 細 川 哲 男
- 決めたこと 守る勇気と続ける努力 ルールを守って 安全作業
日本クリーン北海道(株) 浅 田 智 子
- 危険予知 思ったその時 小さな改善 やらずに後悔 大きな災害
北海道クリーン開発(株) 川奈野 法 子
- 決めたこと、守る勇気と続ける努力 基本に忠実、安全作業
(株)アサヒファシリティズ 北海道支店 三 倉 知 大
- 声かけて 防げる事故が そこにある
北海道クリーン・システム(株) 正 野 菜津美
- ゴミ収集 手を入れない 押さない 押し込まない 防ごう針刺し事故
北海道クリーン・システム(株) 真 田 智 之
- 先をみすぎて足もと見えず 一歩一歩が安全作業
札幌施設管理(株) 菅 一 茂
- スマホ見る その瞬間に 悪魔来る
(株)トーショウビルサービス 高 坂 康 一
- 慣れた作業 視点を変えたら 危険作業 みんなで見直し 安全作業
北海道クリーン・システム(株) 小 川 好 恵
- 慣れた作業に落とし穴 見る目気づく目危険予知
北海道クリーン・システム(株) 前 原 かなえ
- 慣れるほど 忘れてしまうその危険 気持ち引締め安全作業
東京美装北海道(株)釧路支店 田 中 和 也
- ミーティング 生かす職場に 事故はなし
北海道クリーン・システム(株) 荒 谷 智 子
- 見る目 聞く耳 気づきの心 五感を使って 危険予知
北海道クリーン・システム(株) 名 尾 正 博
- 見ない聞かない聞いていない 積もり積もって失う信頼
協和総合管理(株) 斎 藤 千 秋
- もう一度 初心にかえって再確認 基本作業と安全確認
東京美装北海道(株)北見支店 山 中 真 代
- 要注意！ 不慣れ・慣れすぎ・急ぎすぎ
東京美装北海道(株)千歳支店 松 藤 厚 子
- 労働は 心身ともに 健康で 東京美装北海道(株)北見支店 七 条 由香子